

異世界 子育てしながら冒険者します

ゆるり紀行

Minazuki Shizuru
水無月静琉

シルフィール

タクミを異世界に転生させた風の神様。

ボルト

タクミの契約獣となったサンダーホーク。

フイート

タクミの契約獣となった飛天虎。小型にもなれる。

ジュール

タクミの契約獣となったフェンリル。小型にもなれる。

登場人物

グランヴァルト・ルーウェン

ガディア国騎士団シーリン支部の隊長。男前だが、いわゆる脳筋。

タクミ・カヤリ

異世界に風神の眷属として転生した本作の主人公。アレンとエレナの保護者。

エレナ

兄・アレンとともにタクミに保護された少女。格闘術が得意。

アレン

タクミに保護された少年。格闘術が得意。

序章

木、木、木……。三六〇度見渡す限り、鬱蒼と茂る木々。
道らしい道はなく、足元も茂みに覆われている人氣のない森だ。

枝の隙間から微かな光が零れているところを見ると昼間のようなだが、密生する木のせいで全体的に薄暗い。

シルよ……もう少しマシな場所 wasn't だったのか？

何故ここなんだ？ 選択肢はいくらでもあっただろう？

「グルルルルツ」

少し前に別れたばかりの人物に向かって、愚痴の一つや二つ言っても許されるだろう……などと
考えていると、突然、獣の唸り声が聞こえた。

僕——茅野巧は、慌てて周囲を見渡す。

すると、少し離れた所から確実にこちらに向かって走ってくる獣——レッドウルフが一匹。

レッドウルフは赤毛で大型犬くらいの体躯を持つ、狼の魔物だ。確かランクはCだったかな？

あれは完全に僕のことを獲物認定している。

ぶっつけ本番で自信はないが、このまま襲われるわけにはいかないので、こちらに向かってくるレッドウルフにピストル型に構えた手で狙いを定める。

『《エアショット》』

僕が叫ぶと同時に、指先から空気の塊が弾きだされた。

空気を圧縮し、弾丸に見立てて放つ魔法だ。空気弾はレッドウルフに命中し、レッドウルフは「ギャイン」と声を上げながら後方へと吹き飛ぶ。

上手く当てられたことに安堵するも、まだ動くのではないかと警戒した。

しばらく観察したがレッドウルフはそのまま動かなかったので、無事に倒せたのだろう。

「初っ端からこれかよ……」

はあ……と溜め息をついてレッドウルフの死骸に近づき、それを『《無限収納》』に回収した。

第一章 異世界で子供を保護しました。

「大変、申し訳ございません！」

「……」

気がつくど、目の前に白に近い銀髪の見知らぬ青年がいた。

そして彼はいきなり、僕の目の前で床に這い蹲るように土下座をした。

いやいや……あなたは一体、誰ですか？

二十歳前後だろうか。僕より少し年下ではないかと思う。下を向いたまま、ピクリともしないの顔はわからない。

わからないのだが……何故だろう。この青年はきつと、整った顔をしているんだろうなあ……と思う自分がいる。

そんな彼が、どうして僕に土下座をしているのかは不明だ。

なにしろ僕は数分前に、見覚えのない場所で目を覚ましたばかりなのだから。

そう、僕はいつの間にか知らない部屋にいた。

四方を白い壁に囲まれた部屋。広さは八畳くらいだろうか。その一室には白い扉が二つ。窓

は……ない。室内には革張りの二人掛けのソファアが二つ、向かい合わせに並んでいる。ソファアの間には漆黒のガラステーブル。それで全部。他には何もなかった。

うん……。壁が白いから、この「いかにも」社長室にありそうな応接間セットが非常に際立ち、存在を主張していた。まあ、そんなことはどうでもいいんだが。

知らない場所にいるってことは、誘拐されたのか？　と調べてみたものの、拘束されているわけではないし、何より誘拐犯と思しき人物が土下座じゃ……ねえ……。

僕は部屋の中を彷徨^{さまよ}わせていた視線を、ちらりと青年に戻した。

うん、まだ頭を下げ続けている。

これはあれか？　僕が何か言わないとこのままなのだろうか？

だけど、いい加減説明が欲しい……。仕方がないから、とりあえず彼に声をかけようと思う。

「あゝえっと、あなたは誰ですか？　それで、僕がここにいるのはどうしてですか？」

僕がそう声をかけると、土下座していた青年がやっと顔を上げた。

うん、予想通りもの凄い美形の青年だった。

白い肌に翡翠色の瞳。ハリウッドスターに負けず劣らずの甘い顔立ち。着ている服はシンプルで白い簡素なものだが、それがかえって彼の魅力を引き立たせている。

これはモテる要素しか見当たらないわ。羨ましいを通り越して尊敬に値するかもしれない。

そんな彼だが、じつくり不躰に観察していた僕を咎めるどころか、彼もじつと、こちらを見つ

めていた。……相変わらず、床に座ったままだが。

立っている僕のことを上目遣いで見上げているので、「待て」と言われている犬のようだった。

軽く瞳を潤^{うる}ませているし……。

これは僕のほうが悪いのか？　と勘違いしそうになる。もちろん、悪くはないがな！

初^{はつ}端^ぽ、彼の謝罪から始まったのだから、僕は悪くないはずだ。きつと！

「……初めまして。茅野巧です」

はあ、と溜め息をついてから、僕は名前を名乗ってお辞儀を試みた。

何故かという、あちらから何のアクションもないからだ。

「ご丁寧ありがとうございます。僕はシルフィールと申します。シルと呼んでください」

「わかりました」

しっかりと相手から返答があったので、「よし、これで先に進める！」と思ったのだが――

「……」

「……」

――会話が続かない。

何故、名乗って終わるんだっ!?　話の続きは？

説明ブリーズ！　事情を知っているのは貴方^{シル}だよ！

「あゝ……シルさんはどこのどなたで、僕は何故ここにいるんですか？」

仕方がないので、僕からシルフィールと名乗った青年に質問をする。

「呼び捨てで構わないです。……えっと、巧さんの立場から見ると、僕は一応、神になります。そして、ここは所謂神域の一面です」

「……はあ!?」

思ってもみない言葉が返ってきた。

シルが神様で、ここが神域だって？

そんなことを言われても、「はい、そうですか」と信じられるわけではない。

これはきつとあれだ！^{あらで}新手の詐欺だ！

「さ、詐欺じゃありません」

「えっ!?」

僕は驚いて、目を見開いた。

心を読まれたのか？ そうとしか思えないくらいに、タイミングの良い言葉がシルの口から出てきた。

「あつ、その、心を読むことはできますが、今は読んでいません」

読めるのかよっ！

どうやらシルは心が読めるらしい。一応、神様っぽい能力ではある。

「今読んでないなら、何で僕の思っていることがわかるのさ！」

「何となくです。表情を見たらそう考えていそうでしたので、訂正しておこうと思ひまして」

いやいやいや！ さっきまで捨てられた子犬のようだったのに、今は何故、^{なぜ}こんなにも冷静に対処しているんだ、この人。どう考えたっておかしいだろうっ！

だが、理解した！ 真面目に対応していると、疲れる相手だということだけは！

「……シル、状況を簡潔に説明してくれる？」

「あつ、すみません。僕、巧さんのことを誤って殺しちゃいました」

簡潔すぎっ!! 何なんだよお〜

——誤って殺しちゃいました。

まさかの、殺人申告。

どうやら僕は、この神様に殺されたらしい……。いや、もう……これはどういうことだよ……。

頭に疑問しか浮かばない僕に、シルはソファアへと移動するように勧めた。

とりあえず、僕は大人しくソファアに腰掛け、改めてシルから説明を聞くことにする。

「えっと……ある場所に^{ゆが}歪み」という時空の裂け目ができてしまったんです。それで、そこを補強して元に戻そうとしたのですが、その……僕、力を込め過ぎちゃいまして。^{ゆが}歪みの通じていた先。その場所にですね、巧さんがいて……その……巨大な力が巧さんに直撃してしまいましたっ！」

「はあ……………」

僕は堪らず長い溜め息をついた。

シルの説明通りだとするなら、シルに悪気があったわけではなく、些細な（？）力の誤差で起こった事故のようなものだ。

まあ、僕にとつては単なる事故でだけで済ますことはできないけどな。

なんでも、僕の身体はシルの力が直撃した影響で、既に消滅してしまっているんだってさ。

辛うじて精神だけをこの神域に引っ張ってきたものの、僕の精神は力の衝撃で状態が変質しているそうさ。

おかげで輪廻の輪から外れてしまい、普通に転生することができなくなったんだって。

これがシルの土下座の理由らしい。

うーん……。「転生できない」と言われてもね……。死んだ後に転生している感覚は、普通の人間にはないと思うんだが？

ほら、前世とか覚えているほうが稀だろ？ そのことを考えると、「二十八歳にして人生が終わった」ってだけかな？

まあ、突然死んでしまったのは残念ではあるが、生きていれば事故などで突発的に生涯を終える可能性は少なからずある。

そうなると気になるのは、普通に死んだ場合はどうなるのかということだ。死んだ自覚もないまま転生するのだろうか？

だとするなら、僕は今こうやって会話ができるんだから、精神だけでも無事だったことを喜ぶべきか？

うーん……正直よくわからない。それよりも聞きたいことがあるのだが――

「で、僕はこれからどうすればいいんだ？」

「ええええっ!？」

死んだことよりも、今後についてのほうが大事だよな。そう思って話を進めようとすると、シルが驚きの表情で叫びだした。

何だよ、その反応は!？」

「えっ？ まさかのアフターサービスなし？」

マジで!? 僕、ずっとこのまま？ 転生できないなら、魂のまま浮遊し続けるってこと？

えっ？ 幽霊？ 認識されない存在ですっつと？

「いいえ。違います、違いますっ! 僕、罵られることを覚悟していたので、巧さんがあまりにもあつさり受け入れて驚いてしまっただけです」

「あーうん。シルの場合、罵らないほうが反省するような気がする」

「……」

あつ、黙った。きっと凶星なのだろう。

怒ってもよかったんだが、僕はただ本当に死んだという実感がないんだよ。だから、なんか怒る

気力が湧いてこなかったただけだ。

さらにはシルが最初から低姿勢すぎて、怒りが削^そがれた。

実はそれが目的であの態度だったのなら逆に腹が立つんだが、シルの場合はそういう腹芸はできないだろうと、この短時間でもわかる。

「嘘だよ。そこまで怒ってないから、半分は冗談」

「ええ!? 冗談? ……えっ、は、半分っ!」

「そう、半分。力加減を間違えて失敗したのは事実だから、そこは反省して」

「……はい」

うん、徐々にシルの扱い方がわかってきたかな。

神様相手にこんな態度でいいのか? なんて思ったりもしたが、シル本人が気にしていないみたいだからいいか。

「落ち込むのは後でね。で、僕はこれからどうなるの?」

「あつ、はい。まず新しく巧さんの身体を創って、それに魂を定着させます」

「新しい身体?」

「はい。僕の力で構成します」

シルが創る……。

……………。

……………。

……………。

……………。

「……………失敗して、変な身体になりそう」

なんか、不安しか感じられないんだけど……。シルって、ドジっ子属性っぽいしさ……。

物理的に手足がないっ! なんてことはないと思うが……。

手足が機能しないっ! ってことは普通にありそうで怖い。

「なりません! それは大丈夫です!! 信用してくださいっ! 僕の全力を行使し、ちゃんとしたものを創り上げてみせますっ!!」

「全力は危ない気がするからやめてくれ。慎重に頼むよ。……で、それから?」

「はい、頑張ります! 新しく構成された巧さんは多少なりとも僕の力が宿ってしまうため、残念ながら地球に戻ることはできません。ですので、僕が管理を担^にっている世界——エーテルディアという世界に転移していただきます。巧さんからすると、異世界ですね」

シルの力で僕の身体を創るのだから、力が宿るのは仕方がないよな。

その力が宿った身体だと、地球で生活するには不都合があるらしい。

シルは別の世界の神様だって言ってたし、確かに問題があるんだろう。

で、僕が行く世界はエーテルディアと言って、そこには五人の神様が存在するんだって。

創造神マリアノーラ、火神サラマンテイル、水神ウィンデル、風神シルフィール、土神ノームードル。

創造神マリアノーラ様が主神として君臨していて、シルを含めた他の四人の神様がマリアノーラ様を支える形で世界を管理している、と。

そこは異世界といえはお馴染みの剣と魔法の世界なんだってさ。

「ふ〜ん。でもさー、僕、運動神経がないから簡単に死にそうなんだけど？」

「大丈夫です！ 身体を丈夫に創りますから！ あと、スキルも与えますので簡単に死ぬようなことにはなりません」

そうか。身体が丈夫になれば、簡単には死なないよな。

それにスキルね……。

「スキルってあれだよな？ ゲームとかでよくある……」

「そうです！ そのスキルです!! 何か欲しいものはありますか？」

「そうだな……。まず言葉が不自由なのは嫌だな」

言葉は大事だ。エーテルディアの言語がどんなものかは知らないが、意志疎通ができなきゃ苦労しそうだしね。

「言語や簡単な知識は身体に刷り込ませておきますので大丈夫です。そうですね〜。あと、鑑定スキルもつけておきます。それがあれば、仮にわからないものがあつたとしても、調べられま

すよ」

「ああ、いいな。頼むわ。あとアイテムボックス！ そういうスキルはある？」

異世界といえ、アイテムボックスだろ。これの有無で難易度が断然違ってくる。

「マジックバッグっていう大容量の鞆型の魔道具まほうぐしもありますけど、時空魔法の一種である

《無限収納》インペントリというもののほうが、中に入れているものの時間が止まるのでおすすめですな」

「おお、それそれ！ それを使うようにして！」

《無限収納》インペントリ！ いいね〜。食糧を入れるなら、時間が止まるのは魅力的だ。

そうだなあ、あとは身を守るくらいはできないとな！

「あとは自衛ができるように、魔法とか、攻撃手段は欲しいかなあ」

「わかりました。指定がなければこちらで見繕みづろいますが、いいですか？」

魔法といっても種類があるよな。武術を習っていたことはないので、武器もこれといって使えるものがあるわけじゃないし……。種類がわからないから、シルが適当に選んでくれるならそれでいいかな？

一応、シルは神様だし、創った身体の適性に応じて選んでくれるだろう。

「じゃあ頼むわ。あとは、さすがに無一文で放り出されるのは勘弁かな」

「わかりました。とりあえず、僕の属性である風魔法は無条件でつきます。魔法の使い方も身体に刷り込ませておきますね！ さらに《無限収納》インペントリにお金と必要そうなものを適当に入れておきま

す！」

シルは風の神様だもんな。風魔法っていったら、ウィンドカッターとか、空気弾とかが定番か？まあ、身体に刷り込みってことは、何も考えなくても使えるようになるのかな？それはそれで助かる。しかもお金だけじゃなくアイテムも貰えるとは、言ってみるもんだな。

「あとは大丈夫ですか？ 創った身体に魂を定着させる間、巧さんには眠ってもらいますけど、今のうちに聞いておきたいことってあります？」

「うん？ これでシルとはお別れってことか？」

「直接会って話す、という意味ではしばらく無理ですね。会話だけなら、神殿にある石像に向かって念じてもらえば可能です」

「神様に連絡してもいいのか？」

「はい。巧さんは問題ないです。忙しくて応じられない時もあるかもしれませんが、基本的にいつでも連絡してくれて大丈夫ですから」

えっと……言葉は大丈夫。知識もつけてくれる。必要そうなスキルやアイテムは用意して貰える。忘れているものはないかな？ 大丈夫だよな？

「今のところ思いつかないかな。何かあれば神殿を頼るよ」

「はい。お待ちしています。そしてご迷惑をおかけしました。次に巧さんが目覚めた時は、あちらの世界となります。ぜひ、新しい生活を楽しんでください」

そう言うシルに頷くと、そのまま意識が遠のいていった。

あつ、最後に「身体を創る作業は慎重に！」ってシルに念を押すのを忘れた。

◇ ◇ ◇

——というわけで、僕は異世界の地・エーテルディアへとやって来たのだが、気がついたら見渡す限りの森という状況で途方に暮れていた。

「えっと……《オープン》」

とりあえず、現状だけは確認しようと、刷り込まれた知識を頼りにメニューを起動させる。

すると、目の前に黒い半透明のウィンドウ画面のようなものが現れた。これはシルが特別につけてくれた能力の一つだ。

ステータス

【名前】タクミ・カヤノ

【種族】人族？「風神の眷属（仮）」

【職業】——

【年齢】 20

【レベル】 3

【スキル】 光魔法50

闇魔法50

風魔法150

時空魔法100

生活魔法100

剣術50

投擲術18

鑑定200

解体100

料理85

裁縫23

洗濯12

掃除31

細工37

算術107

読書125

身体異常耐性300

精神異常耐性300

物理攻撃耐性300

魔法攻撃耐性300

【称号】 異世界転生者

創造神マリアノールの祝福を受けし者

現れた画面にはステータスが載っていた。

名前は……フルネームのままでいいんだな。よく家名持ちは貴族のみとか、そういう設定もあるけど、大丈夫そうだ。

って、えええ!? 種族! 人族にクエスチョンマーク!? 僕、人じゃないの?

っていうか、眷属? (仮) って、神様の眷属になっちゃっているよ!?

聞いてないよ、シル!!

何でっ!? と思ったが、よくよく考えたらこの身体はシルが創ってくれたものだから、そういうことなのだろうか……? 力が宿るとか言っていたし……。

今さら、どうしようもないよな……そういうことにしておこう。

職業。空欄。まあ、そうだね。

二十歳……ばっちり若返っているわ……。

レベル3……うん?

……ああ、レッドウルフを倒したからレベルが上がったのか。なら、問題なし。

スキルは……わりとまとも……かな? シルのことだから、正直言って「つけ忘れた」なんてこともあり得るんじゃないかと思ってたけど。うん、なんか安心した。

ええと……スキルの数字は熟練度ね。50で一般的な腕で「多少は使える」程度、100を超えれば熟練者。200を超えれば達人級。MAXは300? そこまでいったら神業ものつと。

なるほど。熟練度を見る限り、キリのいい数字のスキルがシルのくれたもので、料理とかはもと僕が持っていたものって感じかな?

地球では一人暮らしだったから料理は日常的に作っていたし、ボタン付けや日曜大工くらいはたまにしていた。

それにしても、耐性をつくスキルは……完全におかしいよな? 熟練度MAXだぞ。

これはあれか？ シルが身体を丈夫に創るって言うたからか？ ああ、もう……張り切りすぎだよ……。

えっと、次は称号ね。称号って、通称とか二つ名とかのことだよな？

異世界転生者……まあ、そうだね。間違っではないない。

あとは……創造神ってシル達、四柱の神が支えるこの世界の主神様だよな？ 祝福ってなんですか？ いつの間に祝福を受けたんですか？

まあ、たぶん寝ている間か……それしか考えられないし……。

でも、こういう場合って、普通は創った神様の影響で「風神シルフィールの」ってなるものじゃないのか？

——ピロントゥ

あつ、頭の中で電子音が聞こえたと思ったら、称号が増えた。

なになに……【風神シルフィールの友人】。

……よし！ 次いこうか！

えーと、次は……ステータスというメニュー項目の横にタブがある。マップだな。

今度はそれを選択してみると、画面全体に地図が表示された。どうやら世界地図のようだ。

地図には大まかに点線が引かれ、国の名前・王都の位置が示されていた。横長のメイン大陸に十の国。島国が一つ。小さな諸島で構成された連邦国が一つ。全部で十二の国がある。

大陸中央の南側には、国一つ分くらいの面積の森があつて、そこには「ガヤの森」と記されている。

その森の中に、一つの白いピンが刺さっていた。そのピンに触れてみると地図が拡大され、ピンを中心とした詳細の地図となった。

うーん、これは僕のいる場所だね。きつと。

地図を見ながら少し歩いてみると、それに合わせてピンも移動している。よし、現在位置ってことで決定！

そのまま地図をスライドさせて、森とその周辺を調べてみた。

このガヤの森はとても大きく、五つの国に接している。

さて、どこに向かうか？

現在地からすれば、森の東側のガティア国が一番近い。森を出て少し行けば、シーリンという街がある。んー、そうだな。そこにしよう。目指すはシーリンの街だ。

えーと、次は……地図の隣にあるタブはアイテムリストだ。今度はそれを調べようと思ったところで、ふと視線を感じて、僕はそちらを見た。

「ん？」

視線を向けると、そこには幼子おとこが二人いた。黙ったまま、じつとこちらを見ている。

その子達は瑠璃色ろうりしきの髪に金の瞳。背丈は僕の腰くらい。痩せ細った身体はボロボロの貫頭衣かんどういのよ

うなものを纏^{まと}い、全体的に薄汚れていた。

髪^{かみ}の長さや雰囲気からして男の子と女の子だが、そっくりな見た目をしている。双子かな？
こんな森の中に子供だけにいるのはおかしいが、周りに他の人の気配はない。

「迷子かな？ 誰かと一緒にじゃないの？」

「……」

一番可能性の高いものを口にしてみたが、子供達は首を傾^{かし}げるだけだった。黙ったまま、きょとんとしている。

「お父さんやお母さんはどうしたのかな？」

「……」

また、首を傾^{かし}げた。

僕が二人に近づこうと一歩踏み出すと、子供達は一歩下がった……警戒しているようだ。

どうしよう……試しに鑑定スキルを使ってみようか。

男の子に向かって心の中で「鑑定」と念じたら、ウィンドウが現れた。鑑定は人にも有効らしい。

ステータス

【名前】――

【種族】人族？

【職業】――

【年齢】5

【レベル】12

【スキル】水魔法

【称号】?????

格闘術

投擲^{とうてき}術

気配感知

身体異常耐性

他人のスキルだと、熟練度までは見られないのか。

それとも僕の鑑定スキルの熟練度が低いから表示されないのだろうか？ でも、所持しているスキルがわかれば問題ない気がする。

女の子のほうにも鑑定を試してみたけど、全く同じだった。

……それにしても、この子達のステータス……どう見ても普通じゃない……よな？

名前の部分が空欄って……名前がないってことか？ どういうことだ？

種族も僕と同じ【人族？】だし。こういうよくわからない種族って、よくいるものなのか？

称号もクエスチョンマークだ……。

年齢は五歳だが、栄養が足りないのだろう、三歳児だと言われても違和感なく信じるくらいの大

きさだった。

ん、この子達、どうしようか？ 森の中にこのままにしておくのは、人道的に良くないよな……。

「怖いことは何もしないから、こっち来てくれるか？」

僕が膝を突いて手招きしてみると、恐る恐るだが子供達は近づいてきてくれた。

あつ、呼んだら来てくれるんだ。

「えつと……《ウォッシング》」

まずは生活魔法を使って、二人の身体を綺麗にした。

生活魔法は、その名の通り日常生活で役立つものだ。対象を洗浄する《ウォッシング》、周囲を照らす《ライト》や、乾燥させる《ドライ》など……。威力は必要最小限だが、様々な属性があり、少量の魔力で使えるとても使い勝手のいい魔法だ。

魔法をかけた瞬間、二人は驚いたように目をパチパチと瞬かせていたが、危険はないと判断したのか、逃げることはしなかった。

「《ヒール》」

綺麗になったら、二人の身体のおちこちに小さな傷があることに気づき、治癒魔法をかけた。治癒魔法は光属性だから、僕の持っているスキルの範囲内だ。

生活魔法も回復魔法も使うのは初めてだったが、刷り込まれている知識のお蔭で問題なく使うこ



とができた。

「よし！ これでいいな。次はご飯か……」

これだけ痩せているのだから、お腹は減っているだろう。

僕はそう思い、確認しようと思って開きっぱなしにしていたアイテムリストを見た。

「えっと、入っているのは……お金に装備品。薬に……水と食料。食料は……つと、ええと……堅焼きのパンと干し肉……。今のこの子達には厳しいかもな。消化にも悪そうだし……。あつ、果物。これなら食べやすいかな？」

果物なら甘くて水分補給にもなるだろう。僕は「ランカの実」という桃に似た果物を《無限収納》から取り出し、二人に差し出した。

「これ、食べな」

果物を差し出したものの、子供達が受け取らないので手を取って、その上に載せてやった。

二人はまじまじとランカの実を見つめ、匂いを嗅いでいる。危険がないかじっくり確認すると、やがて、ちびちびと食べ始めた。……小動物みたいだな。

果物を口にしたのを見て安心し、食べているうちにもう一度確認しておこうとアイテムリストを見た。

「あとは……生肉に野菜、小麦粉……ね……」

……シルさんよ。これはちよつと……。

食材を用意してくれたのはありがたいんだが、調味料や鍋などの道具がなければ、料理は一切できないんだわ。

——ピロントッ

あつ、電子音だ。

シルに向かってばやいたら、調味料セットと調理道具一式がアイテムリストに追加されていた。どうやらシルがこちらの様子を見ていて、アイテムを送り込んでくれたみたいだ。

だったら、やることは一つ！

なあ、シル。食器とかも欲しいな。それに着替えやタオルとかも。

ああ、この森を出て街までそれなりの距離があるからな。外で寝泊まりすることになりそうなんだわ。だから、野営に使えるそうなものとか、コートとか毛布なんかもあると助かるな。

——ピロントッ

そんな風に心の中で言ってみたら、また電子音が聞こえて大量のアイテムが追加された。

……うん。シル、ありがとう。とても助かる。

そうこうしている間に、子供達はすっかり果物を食べ終えていた。そして、じいー……とこちらを見つめている。

追加されたアイテムの中には僕の着替えだけでなく、子供用の服もある。いつまでもボロボロの服のままでは可哀想なので、早速着替えさせることにした。

ウィンドウ画面を《クローズ》させ、《無限収納^{インベントリ}》から子供用の服を取り出す。それぞれに新しいシャツを着せ、お揃いの柄のハーフパンツとキュロット、ブーツを履かせた。

「きついか、動きづらいところはない？ 大丈夫？」

あつ、頷いた。これは問題ないってことか。

この子達は全くしゃべらないが、僕の言っていることはちゃんと理解しているよな？

「僕はこれから森を出て近くの街に向かうんだ。だから、一緒に行こう？」

このまま、この子達を放置して行くわけにはいかない。なので、そう提案したのだが、二人はお互いの顔を見た。

見つめ合って相談しているようだ。会話はしていないが……。

あれか？ 双子間であるって言われている、意志疎通的な？

おっ、こっち向いた。相談が終わったか？

おお！ 頷いた。ってことは、一緒に行くんだよな。

「僕はタクミ。よろしく。君達の名前は？」

まずは自分が名乗って、確認のために二人に名前を聞いたのだが、首を横に振られた。やっぱり名前はないらしい。じゃあ――

「そうだな……。よし、決めた！ 君がアレン。そして君がエレナ」

このままでは不便だし、名前がないままなのはまずいだろう。何となく、思いつきで男の子をア

レン、女の子をエレナと名づけた。

そんな適当でいいのかって気がしないでもないけど、本人達が納得してくれているので問題ない。もう一度ステータスを確認したら、すでにアレンとエレナって表示されていたし。

どういう基準で定まるのかは知らないが、もう変更不能だ。ははは！

◇ ◇ ◇

改めて、アレンとエレナと一緒に三人仲良く、森の外へと向かう。

二人は痩せ細^{やせ}ってはいるが、体力はあった。何も言わずに僕について歩いている。

だけど、子供なのは間違いないのでこまめに休憩を挟み、水を飲ませたりおやつに干し柿を食べさせたりした。

干し柿は、シルが追加してくれたアイテムの中にあつたものだ。干し果実だけでも数種類、他におにぎりやパンなど、すぐに食べられるものもあつた。

ちなみにエーテルディアにも米は存在する。こちらでは白麦^{しろむぎ}と呼ばれ、主に家畜の餌^{えさ}にしているようだ。だから、食料品店では売っていないらしいが……。

手に入れるなら、白麦^{しろむぎ}を育てている村に買いつけに行くか、家畜農家関係者やその人達が取り引きしている商店を探して譲ってもらえないかな？